帝京短期大学 紀要 No. 24：57－64，2023

感覚特性への合理的配慮に焦点を当てた就学支援シートの検討

――感覚プロファイルを用いた支援会議から――

近藤　万里子[1)]・佐々木　沙和子[2)]・伊東　祐恵[3)]
小林　千鶴[4)]・星山　麻木[5)]

1）帝京短期大学　2）帝京大学　3）横浜市西部地域療育センター
4）柚木武蔵野幼稚園　5）明星大学

【抄録】

【問題・目的】診断がなくとも感覚特性の問題を抱える子どもがいる。感覚特性は周囲の環境に影響されるため，環境が大きく変化する就学時には特に配慮が必要である。本研究では，就学支援シートに感覚特性の項目を追加し，就学前後の支援会議を通し，その意義を検討する。さらに今後の就学支援への提言をすることを目的とする。

【方法】就学支援シート作成の流れ：①就学支援シートを保護者が作成する。②就学前の支援会議において，保護者と保育者がそれぞれ記入した日本版感覚プロファイル（以下 SP）の結果を見比べながら，保護者の作成した就学支援シートを共有し，対象児への共通理解を図り，就学先へ伝える合理的配慮の情報を精査する。調査手続き：①就学後，1 年生の 3 月に支援会議をもち，保護者・小学校担任教諭・副園長・コーディネーターの 4 名により感覚を中心とし，C 児の就学後の様子や対象児の小学校で行われた合理的配慮について意見交換する。②会議の内容を録音した逐語録から SP のそれぞれの象限に応じた表を作成し，分析する。

【結果と考察】対象児の行動理解に感覚特性の理解は有用であった。

【結論】就学支援シートに感覚特性の項目を追加する必要性が示された。しかし，就学支援シートの感覚特性の項目を十分に活かすには，感覚特性についての知識が必要である。今後，保育者や教員が感覚特性についての知識を学ぶ機会が望まれる。

【キーワード】感覚プロファイル，感覚特性，支援会議，合理的配慮，就学支援シート

Ⅰ．問題・目的

診断が無くとも，感覚特性に問題を抱える子どもはいる。感覚特性の問題について Dunn[1)] は神経学的閾値と行動反応・自己調整から次のように説明している。神経学的閾値とは，ニューロンの反応に必要な刺激の量であり，高い閾値では多くの刺激が必要であり，低い閾値では少ない刺激で閾値に達しニューロンが興奮する。神経学的閾値と感覚の自己調整行動を合わせた感覚の概念モデルが提唱された。このモデルは 4 つの象限「低登録」「感覚探求」「感覚過敏」「感覚回避」に分類される。「低登録」は神経学的閾値が高く受動的，「感覚探求」は閾値が高く感覚に対して能動的，「感覚過敏」は閾値が低く受動的，「感覚回避」は閾値が低く感覚に対して能動的に回避する。Dunn はこの概念モデルから感覚処理機能の評価尺度を作成した。我々はこれまでに Dunn の作成した評価尺度の日本版感覚プロファイル（以下，SP）を用いた調査を行っている。以下に調査の詳細を示す。

134 名の 5 歳児の担任教諭と保護者がそれぞれ SP を行った結果では，SP の 4 象限で「非常に高い」と評価（以下，SP 高値）された児は，全ての象限において存在し，その中には担任教諭と保護者の両者が「非常に高い」と評価した児も

わずかに含まれた[2]。

この結果の示すように，就学前の5歳児に感覚特性の問題を抱える児がいる。しかし，感覚特性の問題は外からは見えにくく保護者や担任には気付きにくい。そのため問題行動の原因が不快な感覚に起因することは広く知られていない。また，近年は小学校入学後に小1プロブレムなど幼児期から学童期への適応の難しさが問題となっており，保育から教育への引き継ぎが重要とされている。中でも就学支援シートは就学前の情報を伝える重要なツールとして活用されている。しかし，感覚特性の問題が知られていないことから就学支援シートの内容には感覚の問題についての項目が含まれないことがほとんどである。

そこで，就学前の支援会議にて，保護者と担任らがSP結果を見て話し合いながら保護者が作成した就学支援シートを精査し，就学先へ伝えた。本研究では，この一連の支援が就学後の合理的配慮へどのように影響を及ぼしたのかを明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．方法

1. 本研究の広がりについて

本研究は2022年12月の日本発達障害学会における発表をもとに，新たな象限の部分を追加し，改めて分析と解釈を行う。これまでの調査では，SPの4象限のうち高値だった感覚過敏と感覚回避の2象限のみを取り上げ分析・考察を行っていた。しかし，SPの解説書[3]では高値のスコアの象限のみでなく，象限同士の組み合わせにより，感覚処理の優先傾向をより包括的に解釈できるとされている。そこで本稿では，さらに低登録・感覚探求の2象限を加え，全ての象限において分析・考察を行い，全ての象限における合理的配慮を明らかにする。

2. 就学支援シート作成から就学先へ渡されるまでの流れ

①個別のサポートシート[4]を基にした就学支援シートに保護者が記載する。就学支援シート作成に当たり保護者は副園長から書き方の説明を受ける。就学支援シートには基本情報，性格，好きな物，得意なこと，伸ばしたいこと，身の回りのこと，学習，運動，コミュニケーション，本人の困り感への対応方法等が記載される。

②就学前の支援会議において，保護者と担任教諭が記入したそれぞれのSP結果を見比べ，保護者の作成した就学支援シートを共有し，対象児への共通理解を図り，就学先へ伝える合理的配慮の情報を精査する。支援会議後に保護者は精査した内容を含めた就学支援シートを再度作成する。作成された就学支援シートは市から定められている書式に従い作成された就学支援シートに添付され就学先へ渡された。

3. 調査手続き

①就学前の支援会議の内容をICレコーダーに録音する。

②就学後，1年生の3月に小学校で支援会議を開いた。保護者が作成した就学支援シートは既に小学校担任教諭へ引き継がれている。コーディネーターが進行を行い，保護者と小学校担任教諭にSP結果で特性が強く出た感覚から話を聞いた。それらの感覚特性について保護者と小学校担任教諭に入学後から現在までのC児の様子と合理的配慮についての話をしてもらった。この支援会議の内容はICレコーダーに録音した。

4. 研究対象と研究参加者

対象児の選定理由と対象児について述べる。担任教諭・保護者ともにSP結果で高値を付けた児のうちケース会議への参加協力を得られた児（以下，C児とする）を本研究の対象とした。C児のSP調査時の年齢は6歳1ヶ月。園では5歳児クラスに在籍。C児は療育センターで発達検査を受けるなど保護者は心配しているが，診断はついていない。発達検査は5歳2か月で受けている。

発達検査（WPPSI-Ⅲ知能検査）では，総合点では平均，それぞれの指標も平均～平均の上であり，処理速度指標については平均の上～高いという結果であった。

これまでの調査で得たC児のSP結果の数値のみをtable 1にまとめて示す。SPは質問紙法であり，質問への回答は「しない」（0%），「まれに」（25%），「ときどき」（50%），「しばしば」（75%），「いつも」（100%）の5件法によって評価される。スコア得点の合計が低登録では（平均：15~22，高い：23~35，非常に高い：36~75），感覚探求では（平均：26~41，高い：42~60，非常に高い：

61~130)，感覚過敏では（平均：20~30，高い：31~41，非常に高い：42~100)，感覚回避（平均：29~52，高い 53~74，非常に高い：75~145）と評価され，「平均」は下位約 84 % 以内，「高い」は，上位約 2 % から 16 % の得点範囲，「非常に高い」は，上位約 2 % 以内の得点範囲に相当するとされる。この分布には障害のない 3~82 歳のサンプルが用いられている [3)]。「非常に高い」という SP 結果が出た診断のない C 児は，この 2% 以内の得点範囲に相当する。

Table 1．C 児の SP 結果

記入者	低登録		感覚探求		感覚過敏		感覚回避	
保護者	20	平均	50	高い	36	高い	78	非常に高い
保育者	32	高い	38	平均	51	非常に高い	85	非常に高い

次に，支援会議の参加者を示す。幼稚園担任教諭と小学校担任教諭以外は同一人物である。

〔就学前支援会議参加者〕
保護者，コーディネーター（大学教員）
副園長（特別支援教育コーディネーター兼務）
幼稚園担任教諭
〔就学後支援会議参加者〕
保護者，コーディネーター（大学教員）
副園長（特別支援教育コーディネーター兼務）
小学校担任教諭

その他に記録係等が場に参加しているが，直接会議の内容には参加していない者の記載は省く。

副園長は特別支援コーディネーターも兼務しており，大学教員でもあるコーディネーターから感覚特性を含む発達特性についての研修を 15 年前から年に数回受けている。また幼稚園担任教諭も同じく研修を 5 年前から年に数回受けている。小学校担任教諭は感覚特性についての研修は受けていない。

5. 分析方法

就学前後に行われた支援会議の内容を逐語録化した。その後，逐語録の精読を通し，感覚特性の内容から各感覚について把握し，さらにその内容を 4 象限に当てはめ分類した。この分類までの手順は，自閉症体験を綴った文章に対して SP を用いて分析した森戸（2017）[5)] の分析方法を参考とした。

本研究では，就学支援前後の比較と C 児の行動・周囲からの支援の明確化を目的とすることから，分類後の分析方法は次に示すように本研究独自の手順で行った。

本研究では，4 象限に分類した後，就学前後で比較できるよう左側に就学前，右側に就学後の内容を記載した表を作成した。さらに，それぞれの質問項目ごとに抜き出した内容は比較し易いよう簡潔にまとめ直した。低登録は 37，感覚探求は 39，感覚過敏は 30，感覚回避は 89 の質問項目数がある。その中から逐語録にコメントがあった項目のみ抜き出した。表は次章で示す。

6. 倫理的配慮

本研究は，明星大学倫理審査委員会にて承認されている。保護者には，研究の目的と意義についてのインフォームド・コンセントを口頭と書面にて説明し，研究協力は自由意思であること，研究期間は協力辞退が可能なこと，研究への不参加や途中での辞退をしても研究継続の促しや強要はないことを説明した。個人情報とプライバシーの保障については，研究対象者と保護者が個人を特定されて明らかになることがないよう得られたデータは ID 番号で管理し個人が特定できないように配慮した。（承認番号 :H29-059）

Ⅲ．結果と考察

以下にそれぞれの象限の質問項目における就学支援前後の姿を表に示す。この章では，これらの表から得られる考察をそれぞれの象限ごとに述べる。

Table 2 ～ 5 には会議参加者それぞれの発言をまとめた内容が記載されているため発言者については明確にすべき場合のみ次の記号で示す。保護者（P)，コーディネーター：大学教員（C)，副園長：特別支援教育コーディネーター兼務（V)，幼稚園担任教諭（T1）小学校担任教諭（T2）

1. 低登録についての検討

低登録とは，神経学的閾値が高く，行動反応が受動的な状態を示す。高閾値は，強い刺激でないと気づきの値を超えないため，反応なしや

反応が遅れる現象が見られる。低登録の質問項目 47（Table 2）に「道に迷う」が挙げられているのは，神経学的閾値が高い子どもは刺激に気づきにくく，刺激にする目印が分からず全て同じような風景と感じられ，特徴を認識できないためである。

「どこを見ていいか分からない」「折った線が分からなくなる」という逐語録のコメントからC 児は，目印となる刺激に対して反応できていない可能性がある。

2. 感覚探求についての検討

感覚探求は，神経学的閾値は高く，行動反応は能動的な状態を示す。低登録と同じく感覚探求でも質問項目に該当するコメントが少ない。これはC 児の神経学的閾値が低い傾向にあり，

Table 2．C 児の「低登録」における就学前後の姿

番	質問項目	就学前支援会議	就学後支援会議
47	よく道に迷う（よく知っている場所でも）	V（就学後に幼稚園での姿を振り返り）：自分の立ち位置の位置取りが苦手。どこを見ていいか分からない。平行だと分からない，上から見て解説をいれてもらうとできる。工作でも自分で折った線が分からなくなる。	踊りなどの自分の位置が分からないと困っている。補助の先生の声掛けによって支援。

Table 3．C 児の「感覚探求」における就学前後の姿

番	質問項目	就学前支援会議	就学後支援会議
28	いすや床に座っているときに体をゆらす	ブランコなど揺れるものが好き。椅子に座って足はつけたまま揺らしている。	なし
45	人や物にさわりたがる	なし	不安を言語化できないときに，何か触ったり物をいじったりする。

Table 4．C 児の「感覚過敏」における就学前後の姿

番	質問項目	就学前支援会議	就学後支援会議
3	AV 機器の音が流れていると課題に集中できない	避難訓練のサイレン音で大泣き	なし
4	まわりがそうぞうしいと気が散りうまく活動できない	集団の中での音や声に敏感・イヤーマフで安心。本人から音源に徐々に近づいていくことで慣れることが可能。	(P) 園よりも人数も少なく，体育館も大きいからそれほどうるさく感じていないよう。(T２) 運動会の練習など集まるとイヤーマフをつけていた。友達もイヤーマフに理解を示していた。楽しくなると大丈夫なときもあるし，廊下に出て音を避けることもある。
21	車に乗るのが嫌い	バスが苦手。	なし
31	暖かいときでも長袖を好む，または，寒いときでも半袖を好んで着る	なし	おしゃれしたいという気持ちから長袖も着られるようになる。

小さな感覚刺激でも気付いて反応しているためだと推測する。

質問項目 45（Table 3）を見ると，不安・ストレスな状況下においては，手への刺激を求める感覚探求の姿が見られる。しかしながら不快な刺激がある場合，他の刺激に集中すると不快刺激への反応が軽減されることが知られている[6]。感覚回避の象限と合わせ解釈を行うと，感覚回避で高値を示したC児の神経学的閾値は低いと考えられ，閾値が高値のため能動的に刺激へ向かう行動ではなく不安感を回避するために，手へ刺激を与えていたと考えられる。

このような行動が見られた場合，大人はC児がストレス下にあるサインと認識し，ストレスの原因を探り解決にあたっていくことが大切である。このようなサインの引継ぎは，言語化し

Table 5．C児の「感覚回避」における就学前後の姿

番	質問項目	就学前支援会議	就学後支援会議
1	突然の，または大きな音に拒否反応を示す。	突然の大きな音が苦手。C児からだんだん近づいていくと慣れる	就学前は音の大きさや突然の声掛けにショックを受けていたが，今は話の内容にショックを受けている。 （P）家では気になっていない。普通。
2	音を避けるために両手で耳を覆う	イヤーマフを使用すると安心。	うるさい時はイヤーマフをつけ，周囲の友達もイヤーマフ使用に理解を示している。
36	さわられることに感情的・攻撃的に反応する	なし	友達から触られても嫌がらない。本当に嫌なときは，辞めて欲しいことを友達に告げている。
54	食器が口に入ったり，食べ物の舌ざわり（食感）だけでおえっとなる	白いご飯のみ。最初は食べられないと泣いていた。	最初に自分で減らし，食べられたら自分で追加している。野菜も食べている。
104	心配性だ	初めては不安。実物を見せて予告する支援をしていた。	初めてのことへの不安，そして，理解した後はできるかどうかの不安。 （V）園では適切な支援で解消可能なこともあった。
105	作業に失敗すると，過度の感情的爆発が見られる	失敗を恐れる。失敗ではないこともできていないと考える。	なし
107	頑固で融通が利かない	なし	完璧主義。しかし「まあいいか」と言えることも少しずつ増えている。
110	すぐ泣く	（V）（T１）毎日泣いていた。泣いて助けを求めていた。	（T2）泣く手前は不安をどう言葉で表現すればいいか分からなくなっている。 (P)家ではそこまで泣く時がない。
111	過度にまじめ（シリアス）	なし	人に指摘されたことを受け取り過ぎてしまい大きくショックをうけてしまう
112	友達を作るのが苦手（例：グループの遊びに関わったり参加しない	少人数の中だと実力を発揮できる	（逆に）人と関わることが好き

周囲に伝えることが苦手な子どもへの理解となる。

3. 感覚過敏についての検討

質問項目 4（Table 4）に対する「本人から徐々に近づいていくことで慣れることが可能」「楽しくなると大丈夫なときもある」とのコメントから感覚過敏には本人の心理的な影響も大きいことが分かる。山下（2015）[7] は，ストレッサーに晒された時，感覚過敏等の様々なストレス反応が現れると述べており，無理に不快な刺激に慣れさせようとするのではなく，C 児が楽しいと感じる活動を増やし，気持ちへ配慮していくことが感覚過敏軽減の一助となるだろう。就学前も無理強いせず本人の意思を大切にしていたことが就学後の支援でも刺激への回避行動を認める指導へと繋がったと推察する。

4. 感覚回避についての検討

感覚回避とは，苦手な刺激を回避する行動が見られることである。質問項目 1（Table 5）においては，過敏に感じる人の声かけが就学前は突然の音や音の大きさであったが，就学後は話の内容へと変化している。認知の発達に伴い，感じる刺激にも変化が現れる。同じく，質問項目 104（Table 5）「心配性だ」においても，就学後の変化が見られた。事前に活動を説明しておくという支援方法を，小学校へ伝えたが，小学校では，C 児は活動内容を理解することができると，今度は活動を上手くこなせるかという新たな不安を感じてしまうことが報告された。就学後は，引き継いだ支援方法のみならず，発達の変化に応じた新たな合理的配慮を考える必要がある。

質問項目 110（Table 5）は，家庭と集団の違いが見られる。集団の中で困惑する C 児の姿に対し，「多分私がもう勝手にそうならないように生活をしちゃってるところもあると思うんですけど，（中略）。そこまで泣く時がないかもしれない。」と家庭では C 児に配慮した環境のため C 児の泣く姿が見られないことが逐語録では対照的に語られている。質問項目 1（Table 5）の音への過敏においても就学後支援会議で母親により「家ではそこまで気になっていなくて，普通なんですよね，家だと。」と語られている。感覚特性の問題の多くは環境に影響されるため，環境が異なれば，感覚特性の問題も変化する。この点を理解しておくことが今後，教員と保護者間の齟齬や対立の回避に繋がると考える。また，教員と保護者間の齟齬のみではなく，園と小学校間の齟齬も環境の違いから生じる可能性はある。環境によって子どもの見せる姿が異なることは就学先にも周知し，お互いに理解しておくべきことであろう。

Ⅳ．総合考察

感覚特性の問題が，適応行動を阻害し，不適応行動のリスクファクターとなることが報告されている [8]。感覚特性から支援方法を導き出す方法は，問題行動の原因を考えることに繋がる。本研究結果から，感覚特性の問題から考えないと周囲の人々にとって理解することが難しいような C 児の行動が多いことが分かった。子ども理解の伴わない支援は子どもに無理を強いて悪化させ，不登校などの二次障がいを引き起こす可能性もある。

SP は，診断および支援計画作成の際の子どもの状態の確認を目的として開発されている [1]。

SP は，保護者またはそれに準ずる者が子どもの行動についての質問項目に回答していく方法の質問紙法である。質問項目はそれぞれ「A，聴覚」「B，視覚」とセクション毎にまとめられている。そのため，保護者や教諭は記入しながら，問題と感じていた行動はどの部位のどのような感覚特性が原因であったかを意識することができる。

しかしながら SP を合理的配慮検討の資料として活用していくには SP 結果から具体的な話し合いに落としていける専門性のあるコーディネーターの存在が求められる。SP の解説書 [3] では，評価対象者の感覚処理と行動の困難性が示された場合には，理学療法士を中心とした専門チームのフォローアップが指示されている。少なくとも，感覚特性についてある程度の知識を有した者が必要であろう。

感覚特性の項目が追加された就学支援シートは感覚特性の問題について知るきっかけになる。これからの教員養成・保育者養成校では感覚特性についての学びを取り入れた教授をしていくことが喫緊の課題であると言える。

さらに，研究結果から就学前には見られなかっ

た新たな感覚特性の課題が就学後に生じることが分かった。発達とともに新たに現れる感覚特性の行動を理解し支援していくためにも感覚特性についての知識は必須である。

Ⅴ．まとめ

今回の研究ではC児のように診断が無くとも，感覚特性についての課題を抱えている子どもが居り，就学前に行われていた感覚特性に対する合理的配慮を引き継いでいく重要性が明らかになった。診断が無くとも感覚特性の問題がある子どもの存在は自閉スペクトラム症が連続体であることにも関連する。これらの子どもには引継ぎの際に，SPや感覚特性項目を追加した就学支援シートを基に支援会議をもつことでより的確な情報共有が可能となるだろう。

今回の研究により引継ぎ資料の就学支援シートに感覚特性の項目を設ける有用性が示された。そして感覚特性の項目を十分に活かすには，感覚特性についての知識が必要である。今後，保護者や教員が感覚特性について学ぶ機会を充実させることが大事であろう。

【謝辞】

本研究はJSPS科研費JP19K02652の助成を受けたものです。

本研究にあたりご協力下さいました幼稚園の先生，小学校の先生，保護者様に深く感謝申し上げます。

【文献】

1） Dunn，Winnie（1997）The impact of sensory processing abilities on the daily lives of young children and their Families，A Conceptual Model. Infants & Young Children，9（4），pp23-35
2） 伊東 祐恵・佐々木 沙和子・近藤 万里子・小林 千鶴・星山 麻木（2022）幼稚園の5歳児を対象とした保育者と保護者による感覚特性のアセスメントの違いについての調査研究　第69回日本小児保健学会大会論文集 O2-011
3） Winnie Dunn著，辻井正次監修（2015）日本版感覚プロファイルSP，日本文化科学社
4） 星山 麻木・藤原 里美・伊東 祐恵・近藤 万里子・佐々木 沙和子・三宅 浩子（2019）障害児保育ワークブック インクルーシブ保育・教育をめざして　萌文書林出版
5） 森戸 雅子・小田桐 早苗・岩藤 百香・三上 史哲・宮崎 仁・難波 知子・武井 祐子（2017）自閉症スペクトラム障害児の感覚特性に着目した家族支援　川崎医療福祉学会誌27（1），pp13-25
6） 高橋 秀俊・神尾 陽子（2018）自閉スペクトラム症の感覚の特徴　精神神経学雑誌　120（5），pp369-383
7） 山下達久（2015）子どものメンタルヘルス ― 自閉症スペクトラムを中心に ― 心身医学 55，pp1329-1334
8） 平島太郎（2016）WS4-2，Sensory Profile日本版開発における標準化の過程　児童青年精神医学とその近接領域　57（1），pp60-66

Discussion of School Attendance Support Sheets Focusing on Reasonable Accommodation for Sensory Processing Abilities

——From a Support Meeting Using the Sensory Profile——

Mariko KONDO [1)] ・Sawako SASAKI [2)] ・Yoshie ITO [3)]

Chizuru KOBAYASHI [4)] ・Asagi HOSHIYAMA [5)]

1) Teikyo Junior College 2) Teikyo University 3) Yokohama City Seibu Habilitation Center

4) Yugimusashino Kindergarten 5) Meisei University

【abstract】

【Purpose】Some children have problems with sensory processing abilities even without a diagnosis. Special consideration is needed at the time of school entry, when the environment changes dramatically. Because sensory processing ability are affected by the surrounding environment. In this study, an item on sensory processing ability was added to the schooling support sheet at the time of school entry, and the significance of this item was examined through pre-and post-school support meetings. The purpose of this study is to examine the significance of this addition through pre-and post-school support meetings, and to make recommendations for future school attendance support.

【Methods】Flow of creating a school support sheet ; (1) Parent creates a school attendance support sheet. (2) At the pre-school support meeting, the parent and kindergarten teacher compare the SP results they have each filled out, share the pre-school support sheet prepared by the parent, and strive for a common understanding of the target child, and carefully examine the information on reasonable accommodation to be conveyed to the school she will attend. Research procedures ; (1) After the child enters school, a support meeting is held in March of the first year, where the parents, elementary school teacher, vice-president of kindergarten teacher, and coordinator exchange opinions about how the target child has been over the past year and reasonable accommodations made at the child's elementary school. (2) The contents of the questions in each quadrant were extracted and analyzed.

【Results & Discussion】Understanding of sensory characteristics was useful in understanding the target child's behavior.

【Conclusion】The necessity of adding an item on sensory processing ability to the schooling support sheet was indicated. However, knowledge of sensory processing ability is necessary to fully utilize the item on sensory processing ability in the schooling support sheet. The results of this study showed that it is necessary to add a section on sensory characteristics to the schooling support sheet.

【Key words】Sensory Profile / sensory processing ability / support meeting / reasonable accommodation / schooling attendance support sheet